

ふくみらい (うるち米)

＝福島県農業総合センター＝

◆ プロフィール

□ 事業の経過

県は、平成元年度から「バイオテクノロジー活用新品種育成事業」を開始し、福島県農業試験場において水稲の新品種育成を行ってきました。

□ 育種経過:

福島県農業試験場において、平成3年に中部82号を母、チヨニシキを父として交配を行い、10年間かけて育成した品種です。

出穂期は中生の晩で、ひとめぼれとコシヒカリのほぼ中間です。稈長はひとめぼれと同程度で、倒伏に強く、いもち病や障害型冷害への抵抗性も有するため栽培しやすい品種です。また、普及対象地域は本県の平坦部から山沿いまで広く、収穫作業の集中を緩和できることから、品質の良い米を安定供給ができる品種として期待されています。

食味、玄米品質も良好であることから、本県独自育成品種としてオリジナルブランド米用の品種としても期待されています。

□ 今後の予定:

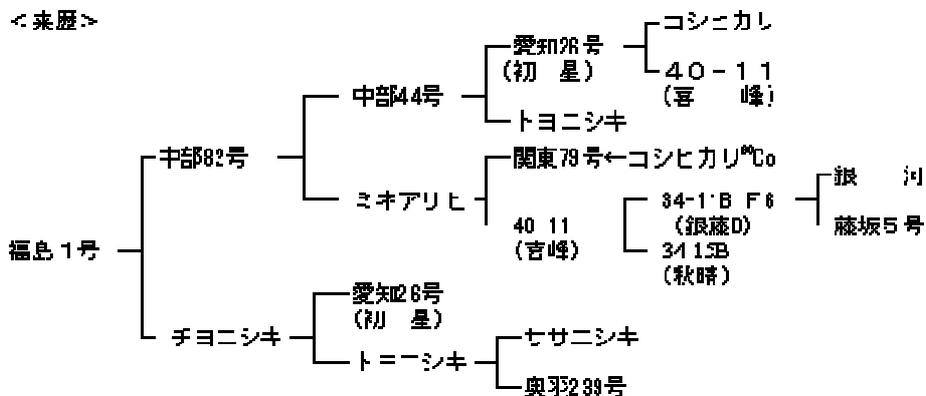
平成13年度に、種子の増殖するとともに、現地実証ほを設置します。平成14年度から一般栽培が可能です。

◆ 来歴

□ 交配

「ふくみらい」は、本県農業試験場において、「農林21号」に替わる良質、良食味、耐冷、耐病、強稈な品種を育成する目的で、平成3年8月に、「中部82号」を母、「チヨニシキ」を父として人工交配され育成した品種です。平成13年度に福島県の奨励品種に採用しました。

□ 来歴



写真をクリックすると大きくなります。

◆ 品種特性

ふくみらいは、栽培しやすく、収量性があり、食味・品質ともに良好な品種です。

□ 育成及び草型

ふくみらいの出穂期は、ひとめぼれやチヨニシキより2日程度遅い「中性の晩」で、稈長はひとめぼれよりやや短く、穂数はひとめぼれ並の偏穂数型です。

□ 耐冷性

ひとめぼれ、コシヒカリ並の「極強」です。

- ☐耐倒伏性
ひとめぼれ、コシヒカリより強い「やや強」です。
- ☐いもち病抵抗性
葉いもちが「中」、穂いもちが「やや強」でいずれもひとめぼれ、コシヒカリより強くなっております。
- ☐穂発芽性
ひとめぼれ、コシヒカリ並の「難」です。
- ☐収量性
ひとめぼれより多く、チヨニシキ並です。
- ☐品質及び食味
品質は、光沢がよく良質です。
食味は、ひとめぼれ、コシヒカリよりやや粘りが少なく、さっぱりとした食感が特徴です。

◆ 特性一覧

項目 \ 品種名		ふくみらい	ひとめぼれ	コシヒカリ	チヨニシキ	初 星
早 晩 性	草 型	中生の晩 偏穂数型	中 生 偏穂数型	中生の晩 中 間 型	中 生 中間型	中 生 偏穂数型
出穂期 (月日)		8. 1 2	8. 1 0	8. 1 8	8. 9	8. 6
成熟期 (月日)		9. 3 0	9. 2 6	10. 3	9. 2 4	9. 2 2
稈 長 (c m)		8 5. 7	8 7. 8	9 6. 7	8 6. 0	8 7. 1
穂 長 (c m)		1 8. 5	1 8. 7	1 7. 8	1 9. 0	1 7. 9
穂 数 (本/㎡)		4 8 1	4 8 5	4 5 1	4 5 0	4 8 5
耐 倒 伏 性		やや強	やや弱	弱	強	やや強
耐 冷 性		極 強	極 強	極 強	やや強	やや強
穂 発 芽 性		難	難	難	やや難	難
耐 病 性	葉 い も ち	中	やや弱	弱	強	中
	穂 い も ち	やや強	やや弱	弱	強	中
玄米千粒重 (g)		2 2. 2	2 3. 0	2 2. 1	2 3. 9	2 3. 8

◆ 普及推進について

- ☐普及対象及び面積
作付対象は、県内平坦部及び山沿い地帯です。特に、初星、チヨニシキの作付地帯及びひとめぼれ、コシヒカリで品質低下が問題となっている地域です。
普及目標面積は、平成17年に5,000haを目指しています。
- ☐普及推進の目的
▶生産安定及び品質向上◀
本県の水稻作付は、コシヒカリとひとめぼれの2品種で約85%を占め、気象災害や病害虫により、被害が集中し品質が低下する場合があります。また、山沿い地帯での初星、チヨニシキ

では年次により、収量及品質が低下する場合があります。

ふくみらいは、耐冷性、耐倒伏性、耐病性が強いいため、普及拡大に伴い本県産米の生産安定と品質向上が図られます。

▶大規模農家及び生産組織の効率的生産◀◀

ふくみらいは、移植栽培ではひとめぼれとコシヒカリの中間の刈り取り時期であり、直播栽培では移植栽培のコシヒカリの刈り取り後に収穫できます。

ふくみらいの普及は、大規模稲作農家や生産組織での秋作業の集中緩和、農業機械や乾燥施設の利用率向上が図られます。

▶多様な流通販売への対応◀◀

米の流通販売、消費は、コシヒカリ、ひとめぼれだけでなく、良食味で、品質が良く、値ごろ感のある米が求められるなど多様化しています。ふくみらいの普及は、多様な流通販売、消費者ニーズの多様化に対応した品種です。

栽培方法について

栽培のポイント	
土づくり	雑草対策
<ul style="list-style-type: none"> 堆肥1t/10a以上の施用します。 土壌改良材を計画的に施用します。 	<ul style="list-style-type: none"> 農作物病害虫防除基準に基づき、一発剤等を散布します。散布後は湛水状態とし、3～5日は水をためておきます。 残草が多い場合は、後期剤を施用します。
種子予措	水管理
<ul style="list-style-type: none"> 塩水選は比重1.13で行います。 浸種温度は12～15℃を保ち、浸種は積算水温120℃を目安とします。 催芽はハト胸状態にします。 	<ul style="list-style-type: none"> 移植後はやや深水管理としますが、活着後は浅水管理として分けつの促進を図ります。 有効茎数確保後は、中干しを行い、その後は間断灌漑としますが、幼穂形成期や減数分裂期の低温時には深水管理とします。 出穂時は湛水管理(花水)とし、その後は間断灌漑とします。完全落水時期は出穂後30日以降とします。
播種	穂肥
<ul style="list-style-type: none"> 播種量は10a当たり4kgです。 	<ul style="list-style-type: none"> 穂肥は、幼穂形成期に窒素成分で2kg/10aを施用します。生育及び気象条件により施用時期及び量を調整します。
基肥(10a当たり成分量)	病害虫防除
<ul style="list-style-type: none"> 窒素5～6kg(中通り・会津地方は6kg、浜通りは5kg) リン酸10～12kg、加里8～10kg (ひとめぼれ並、地力に応じて施肥量を増減します。) 	<ul style="list-style-type: none"> 農作物病害虫防除基準に基づき適期に行います。 カメムシによる斑点米対策で、畦畔の草刈りは出穂10日前までに、出穂後の草刈りは、本田にカメムシ類を追い込むようになりますので、行わないようにしましょう。
耕起・代かき	適期刈取
<ul style="list-style-type: none"> 耕起・代かきはていねいに行い、特に代かきは浅水で行いわら屑等を土中に埋没します。 	<ul style="list-style-type: none"> 刈り取り開始時期の目安は、出穂後の日平均気温の積算気温で950～1000℃、籾の黄化率が85%の時です。
移植	乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> 移植は、できるだけ風のない晴天の日に行います 	<ul style="list-style-type: none"> 乾燥初期の送風温度の上げすぎに注意し、毎時乾減率は0.8%以下とします。 二段乾燥を行い、乾燥ムラや胴割れ米の発生を防止します。 網目は1.85mm以上を使用し、適正流量を確保します。